三木　徹

科学する心　～まずは疑ってみる～

『恐怖の存在』“State of Fear”
マイクル・クライトン著、酒井昭信訳／早川書房

海抜１メートルしかない小さな島国であるヴァヌーツは地球温暖化による水位の上昇で全土が水没する危機に直面していた。ヴァヌーツ政府はこの危機を回避するため、環境保護団体NERFの支援を得て、最大のCO_2排出国アメリカを提訴する策に打って出た。ところが事態は意外な展開を見せる。まずこの訴訟費用を全額負担することになっていた大富豪モートンが急に失踪してしまい、また訴訟を担当する顧問弁護士エヴァンズの周りにも様々な怪事件が発生する。エヴァンズはマサチューセッツ工科大学の危機分析センター所長ケナーから、人工地震や氷河の爆破などの人為的な気象災害を起こすテロリストの存在を知らされる。エヴァンズらはパリ、東京、ロスアンジェルス、南極など世界各地で、これを阻止するための戦いを始める。第１級のアクションで、息もつかせぬ展開につい引き込まれてしまう。

本書は原著では１冊の単行本だが、訳書は上巻と下巻に別れている。上巻ではアクション小説なのに暗号とか地形図のようなデータが出てきて不思議に思うのだが、下巻になるともっと変なものがいっぱい出てくる。グラフや表によるデータも数多く登場するし、なんと言っても引用文献が実に豊富だ。こうなるとどうもこれは普通のアクション小説ではないと思えてくる。学術文献に近い感じもする非常に変わった小説である。

物語自体はフィクションだが、実はこの小説の内容は実際のデータを駆使して構成されているのである。そしてこの本は地球温暖化が、他の大きな目的のために意図的に宣伝されたものであり、実際には起こっていないことを、豊富な科学データの解釈から示している。左派と目されていたクライトンがこの小説を書いたことはある程度の驚きを持って迎えられたし、環境を守る印象が強い地球温暖化説に異議を唱えたことに、当時はかなりの反発もあったようである。

マイクル・クライトンは、ハーバード大学医学部を出て、一時サーク研究所で博士研究員をしていたが、後に作家に転ずることになる。宇宙から来た未知の微生物を扱った「アンドロメダ病原体」、日系企業で殺人事件が起きる「ライジング・サン」、女性上司（デミ－・ムーア）による男性社員（マイケル・ダグラス）に対する（逆）セクハラを扱った「ディスクロージャー」、コンゴの熱帯雨林で伝説の

都市を探索する「失われた黄金都市」（映画のタイトルは「コンゴ」）、琥珀に閉じ込められた古代の蚊が吸った血液のDNAから恐竜を再生させる「ジュラシック・パーク」３部作など、クライトンの作品はことごとくハリウッドで映画化されている。

数年前にアメリカ在住の娘がこの高名な作家のサイン会に出席し、一緒に写真を撮って彼の最新作にサインをもらってきたことがある。本のタイトルを見ると“State of Fear”とある。クライトンのほぼ最後の作品が、この「恐怖の存在」だ。娘と一緒に写っているクライトンは若くてとてもハンサムに見える。ところが驚いたことに、クライトンはその後すぐに亡くなってしまった。何故かその後“State of Fear”が映画化されたという話は聞かない。

私たちは大学で学んでいる。大学は科学をするところである。特に本学では学部と修士課程との一貫教育がなされており、ほぼ全員が自分のテーマで研究をおこなった後に社会に出る。ではどのようにすれば、大学での研究の経験を社会で役立てることができるのだろうか？　それには大学で「科学する心」を身につけ、それを社会で活用することであろう。その基本は「まずは疑ってみる」事にある。先輩のテーマを受け継いで研究をしたが目新しい結果は出ない。そのような場合に先輩の過去のデータや、最終的には指導教官の学説さえも疑ってみるのが大事であり、それが科学する心なのだ。人の言うことを鵜呑みにしていては目新しい研究はできない。社会に出ても創造性を発揮できず、多数の中に埋没してしまうだろう。しかし「科学する心」を持つ人は常にクリエイティブであり、新しい会社やシステムを立ち上げる事ができる。

「恐怖の存在」はわれわれに「科学する心」が重要である事を教えてくれる。この本では、地球の気温が1954年からのグラフを見れば上がっているように見えるが、これは一時的なもので、1930年から見れば決して上がってはいない事を、詳しいデータと共に示している。またCO_2はそのずっと以前から増え続けており、1954年からの気温の上昇には呼応していないことを指摘している。また気温が定期的に測定される大都会では、コンクリート化によるヒートアイランド現象による気温の上昇がよく知られているので、ヒートアイランド現象による気温の上昇

を差し引いて、実際の気温の上昇はどうなのかを示した詳しい解説もある。

科学する心は日常生活でも大事だ。「サプリメント」なるものはとても高価で販売されている。前から気になっていることに例えば「コラーゲンを食べる」というのがある。でも「科学する心」のある人は、「コラーゲンを食べてお肌がつるつるになるというのはホントかな？」と考えるだろう。コラーゲンは体の中でアミノ酸に分解されてしまい、皮膚に到達できるようには思えない。「コラーゲンにはヒドロキシプロリンという特殊なアミノ酸があるのです」なんて言う人もいるが、ヒドロキシプロリンは体内におけるコラーゲンの合成過程で生じるので、アミノ酸として取り込まれるのではない。

世の中はよく考えないとつい迎合してしまいそうな主義主張にあふれている。新聞やテレビのニュースに出てくる情報や意見には偏りがあり、どれが本当なのか分からないことが多い。そうなるとどこか信頼出来そうな局などの意見に頼る人が多い。またどれもが同じ事を言っており、それを裏付けるデータが示されていたりすると、多数だからと思ってつい信じてしまう人も多い。国民が簡単にだまされるのは「科学する心」を持たないからだ。何が正しいかを本当に判断できるのは、大学で研究を体験したわれわれ「科学する心」を持つ人たちのみなのである。「恐怖の存在」はまさに大学での研究体験の重要さを教えてくれる。

執筆者紹介

三木　徹

生物系教授。専門領域は分子細胞生物学。科学的思考をいかにして教え、社会の役に立てさせるかに興味を持っている。

『書名』　著者名　翻訳者名　出版社または文庫・シリーズ名　出版年　税込価格

『恐怖の存在　上・下』マイクル・クライトン著　酒井昭伸訳　早川書房（ハヤカワ文庫）　2007年　各987円

ブックガイド目次へ